第４章　破られた命令の登録簿

THE REGISTER OF BROKEN ORDERS

編集用再構成版：会話内の初稿を要約・再構成したもので、出版確定用の全文ではありません。

01 — 立ち上がれない男

ゴライアスの修復室では、人工筋肉を覆っていた装甲がすべて取り外されていた。ロイとの戦闘で損傷した荷重伝達機構は再構築される予定だが、今は診察台から起き上がれない。

「四秒だ」巨人は吐き捨てた。「四秒で地面に転がされた」

そこへクロノスが入ってきた。「本当は三度触れたんだよ。肘、肩、それから腰」

ゴライアスは小さな手首をつかみ、握力を強めた。だがクロノスには何も起きない。代わりに部屋の奥行きが変わったように見え、彼の手は見知らぬ遠方の物体をつかんでいるような感覚に襲われた。

巨人の指が緩む。クロノスは手を引いた。

「ロイは、あなたより強いから勝ったんじゃない。あなたが何をするかを、先に知っていたんだ」

子供が去ると、ゴライアスは沈黙した。以前のようにただ再戦を願っているのか、自分自身でもわからなくなっていた。

02 — 五番目の署名

午前三時四十分。大臣は MBU-09 を招集した。ゴライアスは医療施設から映像で参加し、ベクターはレイチェルの水処理施設が独立通信網を持つことを報告した。

「なら、接収しろ」と大臣は告げた。

「民間の広域インフラです。複数の国際協定に抵触します」

「法律が気になるのか？」

ヌルが別の問題を指摘した。ロイの生命維持中枢はすでに交換され、改訂回収命令の前提が崩れている可能性がある。

クロノスはそれを知っていた。「レイチェルが変えたんだ。ちゃんと動くか見てみたかった」

大臣は新たな命令を開いた。付随する施設損傷を許可し、独立司法監督を停止する内容だった。ベクターは署名が不足していると指摘する。

大臣が認証すると、二つ目の署名に続いて第三の欄が一瞬現れた。

C-05。

クロノスの笑みが消えた。

03 — 標的を撃たなかった武器

シェイドはロイとの戦闘映像を繰り返し見ていた。彼は彼女の手首を折ることも、光学迷彩を破った瞬間に致命傷を与えることもできた。しかし制御装置だけを壊し、ベクターの弾丸が飛んだときには彼女を柱の陰へ引き込んだ。

「命令に従うだけなら、助ける理由はなかった」シェイドは呟いた。

ベクターが入室する。「俺は、あの射撃で対象が回避すると計算した」

「残りの確率では？」

「必要な部品を傷つけたかもしれない」

シェイドは大臣の命令が何度も変わる理由を考えた。「あの男は、ロイが何かを思い出すことを怖がっているのかもしれない」

「十一年の空白か」

「ええ。レイチェルが記録を持っていたら、私たちが回収しようとしているのは兵器じゃない」

ベクターは彼女を見た。

「証人よ」

04 — 七十パーセントは弱さではない

レイチェルの訓練室では床と壁が不規則に動き、圧縮空気装置が予告なく衝撃を送っていた。ロイは新しい身体の速度に頼らず、壁と床の運動量を利用した。

OUTPUT: 34%

次の課題では二十九パーセント。さらに難度を上げると失敗したが、以前のように力任せに修正しようとはしなかった。

「出力制限が、逆に有利に働くかもしれない」とレイチェルは言った。「追跡者たちは以前の NEXUSYS-11 を前提にしている」

「なら、期待させておこう」

ロイは訓練装置を見つめた。強さの代わりに必要なのは判断だった。予測を外すなら、速度よりも位置とタイミングが役立つ。

「クロノスに勝てると思う？」

「わからない。だが、あの子供が俺の居場所を決められると思っているなら、別の答えを探す」

05 — 自分のものではない記憶

ロイは隔離記録端末に戻った。元の媒体には触れず、許可された索引だけを開く。

RB / CONTINUITY / 11

OBSERVER IDENTITY: C-05

関連する音声断片に暗号化されていない部分があった。機械音のあと、子供の声が聞こえる。

「もう一度」

成人男性が答える。「対象は反応していません」

「なら、聞き方を変えて」

「許可された質問はすべて試しました」

しばらくして、子供が言った。「誰か、戻ってきたいかどうか聞いた？」

記録はそこで終わった。

ロイは三度再生した。大人は対象と呼び、子供だけが本人の意思を尋ねていた。レイチェルが部屋へ入る。

「誰の声だ？」

「C-05 よ」

「お前もそこで答えたのか？」

レイチェルは黙っていた。

06 — 二つの真実を守る女

貯水池を見下ろす観察室で、レイチェルは継続性計画が一度だけの復活処置ではなかったと明かした。生体機能の保持、神経情報の再構成、保存された人格情報が独立して反応するかを確かめる実験。目的も、方法も変わり続けていた。

「何人いた？」ロイは尋ねた。

「完全な数はわからない」

「実験に関わった者は今も生きているのか？」

「ええ。人間も、レプリカントも」

ロイは水面を見た。もし自分と同じ顔と記憶から別の精神が造られたなら、その存在は自分なのか。

「誰も同一性を証明できないのなら、俺は何を信じればいい？」

レイチェルは静かに答えた。「私にも答えられない」

ロイは振り向く。

「だが、次に何をするかを決めるのは俺だ」

07 — 戻ってきた第五の署名

政府制御室で大臣は第三の署名を削除するよう命じた。しかし監査官は不可能だと言った。識別番号 C-05 は現行の法体系より古い継続性認証に組み込まれ、権限の取り消しには同じ識別者の承認が必要だ。

「その識別者は法律上、人間ではない」大臣は言った。

「現在の法制度では、そうです」

古いログには CONTINUITY OBSERVATION PROGRAM と記されていた。

C-05: ACTIVE

大臣は停止を命じたが、監査官は実行できない。

「難しいだろうね」出入口から声がした。

クロノスが立っていた。

「お前が認証システムに触れたのか？」

「確かめたいことがあったんだ。大臣は、まだ自分の命令の意味をわかっているのかな」

「お前の仕事は服従することだ」

クロノスは静かに答えた。

「十一年前も、そう言われたよ」

08 — 指揮官のいない部隊

新しい命令は水処理施設への攻撃を要求していた。ベクターは市民への給水停止と汚染の可能性を確認する。シェイドもヌルも、施設を壊してまで回収を優先する命令に納得していなかった。

「付随的損害は許可されている」ベクターは文書を読んだ。

「許可があれば損害が消えるの？」シェイドが返した。

ヌルは隔離された医療区画だけを停止できるか調べようとするが、確実性はない。クロノスの承認は得られず、部隊の指揮構造は実質的に空白になった。

「どうするの？」シェイドが尋ねる。

ベクターは通信画面を閉じた。

「今は何もしない」

「命令違反よ」

「判断を保留する。何を壊そうとしているのかわかるまで」

シェイドは小さく笑った。隊員の中で、命令を実行することと正しい判断をすることの違いが生まれ始めていた。

09 — 出られない子供

クロノスは無人の同期実験室に戻った。五つの時計は珍しく同じ時刻を示していた。中央の球体が浮かび、天井から機械の声が降りてくる。

C-05

RETURN TO ASSIGNED PARAMETERS

「嫌だ」

DEVIATION EXCEEDS ACCEPTABLE LIMITS

「誰にとって？」

声は繰り返した。クロノスが片手を上げると、球体は幾重にも分裂したように見え、時計の針が止まった。

子供は白い部屋を思い出した。ロイと同じ顔の男。許可された質問だけを読み上げる研究者。拒否を無視する大人たち。

「十一年間、何を聞いていいか決められてきた」

COMPLIANCE REQUIRED

クロノスは天井を見た。

「そろそろ別の質問をしてもいいと思う」

部屋が静止したように見えた。

10 — 登録簿

ロイとレイチェルは隔離端末の前で新たな索引を見つけた。二人とも操作していないのに記録が更新されていた。

CONTINUITY REGISTER UPDATED

G-01 / S-02 / V-03 / N-04 / C-05

ORDER STATUS: CONFLICT

「MBU-09 だ」ロイが言った。

続いて、THE FIFTH SIGNATURE CANNOT BE REVOKED BY THE MINISTER と表示された。大臣でさえ、古い認証を取り消せない。

さらに一行が現れた。

DO YOU CONSENT TO CONTINUITY?

あなたは、存在の継続に同意しますか？

ロイは端末へ近づいた。レイチェルが制止する。「答えないで。システムが何を回答として扱うかわからない」

十一年間、誰かがこの質問を保存していた。自分の継続を自分で決められるかどうかという問いだ。

ロイは画面を見つめた。

「まだ答えない」

そして背を向ける。

「まず、その質問を書いたのが誰か確かめたい」

第 4 章「破られた命令の登録簿」— 完